キュービック式教授法

Cubic Method for English Teaching

森山　宏美*
Hiromi Moriyama

本研究では、幕末以降より今日までの英語教育の流れを概観しつつ、同時に関連学会において考察されるどころか、議論の中にさえ加えられることのなかった「現代の学習者の変貌」といった視点、また「時代の流れに対する配慮」といった側面も合わせて考察することとする。そこで、考察の対象者を大学生にしぼり、彼らが語学学習に何を望み、どのように、語学教育を考えているかといった観点から、又現在実施されている教授方法が今日の教育方法として充分に機能し、学生のニーズに適合しているか否かを、以下、慎重に検討することとしたい。

第１章では、現代における英語教育を改めて見直し、

○英語教育は必要か

○何故、「英語」教育なのか、そして

○何故、これまでの英語教授法が定着して来なかったか

といった点を中心に考察した。今日まで、英語教育存廃論が繰り返し議論される中でやはり、英語教育はひとつの課題となり続けた。その永い過去の議論を振り返り、今一度その根本である３つの疑問を問い直すことを試みた。そして、さらに「文化」「異文化」「英語教育」という３つのキーワードをひろい上げて、

○文化を知るということ

○異文化を知るということ

○異文化を知るということと英語を学ぶということ

という英語教育のもう一歩原点に立ち返り、異文化を学ぶことを考えるとともに、英語教育の全体としての使命は何なのかを考察した。

次に、若干説明がながくなるが、第３章についてふれてみたい。

例えば、大学って何だろう？

学校って何だろう？

学生の心の中にこの疑問がふくらんでゆく。どんどんふくらんでゆく。2010年、2020年を想像してみよう。各々一人ひとりがコンピューターを持ち、例えば、

平成14年10月８日原稿受理　教養部

「油絵を学びたい。」
と思い立ったとする。そのための情報をコンピューターではじき出し、家庭にいながら勉強を始める。質問や疑問あるいは調べて体験したいことが出来たとする。研究所や特定機関へ問い合わせる。ある程度の研究や学習が出来て、海外へも簡単にゆけるし、街はアジア、欧米の外国人があふれている。
「英語教育はどう改革すればいいんだろう？」と、
悩んでいた昔を思うとバカバカしくなる。必要があれば、話をして情報が得れるし、コンピューターで、それこそ何語でも対応してくれる。好き嫌いは別として、英語も聴いたり話したり容易にできる。この冬の時代を乗り切った大学は、別の意味での崩壊危機にのぞまなければならないかもしれない。つまり大学（幼、小学校、中学校、高等学校も含む）の存在のあるいは組織としての存在価値がなくなり、大学受験のための厳しいせり合いや努力は、いったい何なんだろうという疑問を青年たちは持ち始める。かつてはとても手も届きそうにないと思われていた大学が喜んで青年たち、受験者たちを受け入れる時代を体験し始めている。「大学へつまり希望する有名な大学へ入って…」その後の無感動、脱力感……彼らは入ったせっかくの大学を粗末に考えるようになる。「僕のor私のこの大学生活って何なんだろう。」「僕にはor私にはもっとすばらしい未来や希望や夢を実現し、手に届きそうな夢への近道があるはずだ。」と、せっかくパスした大学をおおよそにし、親の言いつけや説得にも従わず去ってゆく学生も中には居るだろう。たとえ去ってゆかないとしても、心のどこかで、大学に対して現代とは違った価値観を持つようになるかもしれない。第２章ではそういった疑問点にもふれてみたいと考えている。

第２章に続き、第３章では、これまでに注目された主な英語教授法を概観し、そのひとつひとつの特徴と問題点に注目したい。

○古典的教授法と近代教授法
○各教授法の概観
　――その特徴と問題点――
○その他の主な教授法

を全体的に思い起こし乍ら、各々の教授法の長所及び短所、そして特に日本において、英語教育のどのような面で貢献してきたかという点も含めてまとめてみた。

第４章では、これまで考察の範ちゅうに入ってこなかった「学生の変貌と英語教育」といった観点から英語指導の在り方を再考した。

○日本人大学生の特質
○学生の問題点と課題
○現代の学生たちと英語教育の在り方

といった面からの議論を提出したい。

第５章では、本論文の中枢であるキュービック式教授法の紹介を試みた。筆者は、日本人に適合する、しかも現代の青少年を観察しながら、現代において要求される教授法の発案に努力

を重ねてきた。このキュービック式教授法が絶対的であると断ずる気持ちは全くないが、何らかの試金石としてまた参考資料となることを希望してまとめてみた。

○キュービック式教授法に至るまでの経過

○キュービック式教授法

○キュービック式教授法に対する学生の反応

○キュービック式教授法における今後の課題

といった点から、各章立てを行ない、キュービック式教授法の要所を説明、紹介した。第６章では、第５章の付加的議論として、

○教師のこだわりと学生の意見

○これまでの教授法への日本人の対応

○英語教育――教師から御両親への手紙

の３点の項目についてまとめている。

筆者が教職についてわずか20年余りを経たばかりだが、その間の試行錯誤の足跡を振り返りそしてまたこれからも続く教壇経験の一時点の統括として、この章立てを試みた。

第７章では、これらの指導の効果を測る「テスト」についてと、その「評価」の在り方をまとめることとした。

○キュービック式教授法の場合の「テスト」について

○評価の在り方を考える

○キュービック式教授法の「テスト」における今後の課題

等について論じた。特に評価の在り方については、今後の大きな論点としてまとめたつもりである。点数のみによる評価点や、○×式問題に何らかの改革を試みることはできないか工夫を重ねているが、今後の「テスト」及び「評価」の在り方を見直す一項目となることを願っている。

終章の第８章では、未来の英語教育の姿を推論してみた。

○ＣＡＬＬの可能性

○教授法のゆくえ

○学校教育の未来と英語教育

についての、３つの見地からの検討を試みたものである。

人々は、受けたい時、受けたい教育を受け、研究したい時に研究が出来、嫌なものを嫌々学んだり、嫌な仕事を嫌々する必要もなくなるかもしれない。そして、プログラム作りもコンピューターを活用する。

学校教育、中でも

英語学習の大変さや、苦しさは、

「いったい何だったのだろう。」と一笑に付する時代が来ると筆者は考えている。